

SHOW HEY シネマルーム

★★★

S. W. A. T.

2003 (平成15) 年9月4日鑑賞
＜試写会＞

Data

監督：クラーク・ジョンソン
出演：サムエル・L・ジャクソン
／コリン・ファレル／ミシェル・ロドリゲス／ジェレミー・レナー／オリヴィエ・マルティネス

👁️👁️ みどころ

「S. W. A. T.」とは、Special Weapons And Tactics。すなわち、「特殊な武器と戦術」で、「立てこもり」事件などに立ち向かう特殊部隊のこと。国際指名手配の麻薬王の「俺を逃がしてくれた奴に1億ドル払う」という宣言が、マスコミのライブ取材で流れたためその護送は大変。クビにされた元「S. W. A. T.」隊員との息つまる攻防戦は見どころタップリ。「S. W. A. T.」の活躍を真正面から描いた痛快活劇だ。

＜S. W. A. T. とは＞

S. W. A. T. とはSpecial Weapons And Tacticsの略。すなわち、選ばれたエリート警察官が訓練を重ね、「特殊な武器と戦術」で、「立てこもり」事件や凶悪事件を解決するための、特殊部隊のこと。『交渉人』（1998年）で有名になった、「立てこもり犯」と「交渉」するのは「S. W. A. T.」ではなく交渉人の役割だが、現場に突入し人質を解放するのは、彼ら「S. W. A. T.」の役割だ。

1960年代後半、ロサンゼルスでは銃犯罪や暴動が多発したため、軍隊経験をもち特別な戦術を、訓練によって体得した警察官によって特殊チームが結成された。パンフレットによれば、正式に「S. W. A. T.」が発足したのは1972年、ロサンゼルス市警(LAPD)が、大都市圏の担当部門内に常駐チームをつくり、訓練の必要性を認識したとき、とのことだ。したがって、LAPDのS. W. A. T. が特に有名で、これが世界中の特殊チームのモデルになっているとのこと。この映画は今まで、『スピード』、『ダイ・ハード』、『レオン』、『交渉人』などの映画に登場してきた、彼ら「S. W. A. T.」の実態と活躍を、真正面から描くために作られたものだ。

＜第1の仕掛けは1億ドルの賞金＞

「S. W. A. T.」の活躍が描かれるのは、「立てこもり」犯への攻撃と人質の解放が多いが、この映画で描かれる「S. W. A. T.」の活躍は犯人の「護送」任務。しかし、通常の「護送」だけでは面白くない。そのため、この映画が設けた第1の「仕掛け」は、些細な交通違反で逮捕された国際指名手配の麻薬王、アレックス（オリヴィエ・マルティネス）が、「俺を逃がしてくれたヤツに1億ドル払う！」と宣言することだ。この発言を世界中のマスコミが、ライブで報道したため、本気でアレックスを逃がし、1億ドルを稼ごうとする者が続出するハメになったのだ。したがって、380万人のロス市民を敵（？）として、6名の選りすぐりの「S. W. A. T.」が、生命がけでアレックスの護送任務に当たらなければならなくなった、というわけだ。もともと、ちょっとマジメに考えてみれば、護送犯からいくらそんな「ボーナス宣言」が公表されたからとしても、現実にはロス市民がその護送犯を逃がすために警察組織に歯向かってくる、などということはいえないただろう。しかし、そんなことを言ったらこの映画の面白さは成り立たなくなってしまう。現に、アレックスを護送するための「S. W. A. T.」を中心とした部隊は、多くのロス市民から爆弾や銃で攻撃され、アレックスは逃がされてしまう事態に……？と思ったら、これは「おとり」部隊だった……。

＜もう1つの仕掛けは内部対立＞

映画を面白くするためのもう1つの「仕掛け」は「S. W. A. T.」の内部対立。すなわち、優秀な隊員でありながら、命令に従わず個人行動をとったため、上司からクビにされた元「S. W. A. T.」隊員、ギャンブル（ジェレミー・レナー）という設定だ。このギャンブルが、本気で1億ドルの獲得戦に乗り出してきたからそりや大変なことは明らか。しかも、麻薬王アレックスは、護送される途中、安い給料で生命がけで働いている隊員たちに対して、「俺を逃がしてくれたら賞金を倍の2億ドルにしてやる！」と、巧みにささやきかけてきたから、なんと6名の隊員の内1人はこの誘惑に負けてしまった……。

＜6人のチームの主役は……＞

6人の「S. W. A. T.」のチームのボスはホンド（サミュエル・L・ジャクソン）。そして、ホンドが選んだ5名の隊員の中心人物は、クビになった元「S. W. A. T.」隊員ギャンブルのパートナーだったストリート（コリン・ファレル）。ストリートはギャンブルと組んだ仕事で命令違反を犯し、単独行動をとった責任を追求されて、「武器保管係」にとばされていた。しかし、真面目にその職分をこなしながら、復帰のチャンスを待っていたところ、ホンドの目にとまったというわけだ。ストリートは、ホンドをリーダーとする、「S. W. A. T.」のチームの中心隊員としてアレックス護送の任務に従事中、なんと昔のパートナーのギャンブルから襲われ、これと「対決」せざるを得なくなっていくわけだ。

＜ホントはインチキ、女性隊員＞

6名のチームの1人にサンチェス（ミシェル・ロドリゲス）という女性がいる。彼女は、小柄な女性だが、気も強ければケンカも強く、武器の扱いも抜群。そんな「才能」をホントに見出されて、サンチェスもチームの一員に加えられた。そして、「模擬試験」の際には、その小柄な身体を生かして大きな役割を果たす。しかし、これはあくまで映画上の「作り話」。現実の姿では、過酷な訓練を要求される「S. W. A. T.」には女性隊員はいないとのこと。

軍隊内での女性登用をテーマに描いた映画には、あの美人女優デミ・ムーアが見事な肉體改造をして主演した『G. I. ジェーン』（1997年）があるが、この映画はそこまでの女性登用の主張はなく、せいぜいチームの構成員の幅を広げる程度の存在。

しかし、今後は現実問題として、「S. W. A. T.」に女性隊員が誕生する可能性は十分にあるだろう。

＜よくできた痛快活劇！＞

「S. W. A. T.」を中心とし、多くのロス市警が警護するアレックスを乗せた護送車への多くの「市民」からの攻撃とアレックスの逃走……。これをハラハラドキドキと観せながら、実はこれはオトリ……。というのが前半のオチ。

そして後半のオチは、警察官を空港に引きつけておいた上で、飛行機を全く別の地点の橋へ離着陸させる離れ業。さすが、元「S. W. A. T.」のギャンブルが考える戦術はプロ級だ。見事にこれが成功し、ギャンブルは約束の1億ドルの振込口座をアレックスに指示するところまで到達した。しかし……。これが本当に成功したのでは、この映画は成り立たない。

そこで6名の「S. W. A. T.」チームとの対決が最後のハイライト。もともと6名の「S. W. A. T.」のチームワークは最後まで維持することはできなかった。なぜなら、そのうち〇〇はアレックスの2億ドルの誘惑に負けて裏切ってしまったから。そして△△は闘いの途中、銃弾を浴びて……。

プロ級の敵を相手に回しての、これだけの大仕事ともなれば、そうすんなりとは成功せず、人間関係から必然的に生まれてくる友情や憎しみ、信頼や裏切り、その他の心の葛藤が発生し、極限状態の中での闘いが展開されるのは当然だ。この映画はこのように、うまく状況設定した中での「S. W. A. T.」の活躍を描く痛快活劇として十分に楽しむことができる。

映画を観終わった後、帰りのエレベーターの中でお客さんが言っていた、「痛快だったね！」という言葉がまさに適切。ああ面白かった！ジャンジャン……。

2003（平成15）年9月5日記